

# 学校だより 北 陵

川西市立北陵小学校  
校長 齋木 久雄

新年あけましておめでとうございます。

本日、3学期の始業式を行いました。旧年中は、本校の教育活動にご理解・ご協力を賜り感謝申し上げます。本年もどうぞ宜しくお願い致します。

さて、厳しい寒さの中で、一見枯れ木のように見える木々も、その外見の裏側では、芽吹く準備を着々と進めています。冬の間蓄えた養分があるからこそ、春の訪れと共に美しい花を咲かせることができるのです。この北陵小学校の子ども達一人ひとりが、美しい花を咲かせるための充実した3学期となるよう、教職員一同、力を合わせて精一杯頑張ります。

以下に、本日の始業式での校長講話の概略を紹介します。

皆さん、おはようございます。13日間の冬休みが終わり、今日から3学期がスタートしましたが、今日登校して来た時に校門付近で何か違いに気づきましたか？

そうですね。校舎の壁面に時計があり、校門の左側に「One for all, All for one 一人はみんなの為に、みんなは一人の為に」の横幕が掲示されていましたね。

その時計（ソーラー式電波時計）は、(高学年の皆さんには、運動会の練習の時にお話をしましたが、)私が今年の3月末で定年退職を迎えますので、少し早いのですが退職記念品として寄贈させて頂きました。また、横幕は、東谷地区青少年育成市民会議から頂いた活動費と学校運営費で作成しましたので紹介します。

次に、新年のスタートに当たり、高橋系吾さんの「その一言」という詩を紹介합니다。

その一言で励まされ その一言で夢を持ち その一言で腹が立ち その一言でがっかりし

その一言で泣かされる ほんのわずかな一言が 不思議に大きな力持つ ほんのちょっと

の一言で

実は校長先生は、小学校の中学年の頃までは、とても「やんちゃ」で、よくイタズラをして先生に叱られていました。この場では、言えない様な事も沢山あります。たぶん当時の学年では、一番の「ごんた」だったと思います。そんな私が、5・6年生の時に受け持ってもらった担任の先生のお陰で、少しずつ変わって行きました。その先生は、ベテランの女性の先生でしたが、良い事をした時には必ず誉め、悪い事をした時には厳しく叱られました。

そして、誉められる時も叱られる時も、先生の「その一言」には、子どもの事を思う深い愛情が感じられました。

また、私は中学校の体育の教師をしていましたが、体育の教師になろうと思ったきっかけは、中学1年生の時の担任の先生が体育の先生で、その先生に憧れたからです。

体育の授業でその先生から「齋木 上手いな」と褒められた一言で、その先生と体育の授業がどんどん好きになり、その先生の様になりたくて体育の教師を目指しました。

最初に紹介した詩の通り、言葉は本当に不思議な力を持っています。たった一言の言葉で元氣や勇気もらい、自分の将来に夢を持つことができます。また逆に、ほんのわずかな一言が、人を傷つけたり悲しませたりもします。

嘘やお世辞は良くありませんが、皆さんも、お友達との会話の中で、お互いに元気や勇気が出てくるような「一言」を掛けられるようになることを願っています。みんな良い言葉を使いましょう。

最後になりましたが、1月は「行く」、2月は「逃げる」、3月は「去る」と言われるように、3学期は、期間も短く本当にすぐに終わってしまいます。特に6年生の皆さんと先生は、3学期末でこの北陵小学校を卒業しますが、「立つ鳥あとを濁さず」の諺の通り、一日一日を大切にしてお過ごし、充実した日々を過ごして行きましょう。これで先生の話が終わります。

次に、私が最近読んだ本の中で、「大切なあなたへ そして先生へ」米多 等（銀河書籍）の中の「だめっ子」は、いない（桑原 律）>を紹介します。

「この子は だめな子ね。」そう言われて未来の夢を失いました。

「あの子は だめな子ね。」そう言われて希望を失いました。

「学力が低いから」「動作がのろいから」「だまっている子だから」「からだに障害がある子だから」「母子家庭の子だから」「生まれがちがうから」

さまざまな理由を並べ「だめっ子」扱いをすることは、人間としての存在を否定すること。

だれにも未来の夢があり、自らの人生への希望がある。それぞれの良さを見つけ、お互いに励まし合ってこそ人間。それぞれの個性を認め、お互いに支え合ってこそ人間。

「だめっ子」は一人もいない。「だめっ子」は、どこにもいない。

これは、ヒューマン・シンフォニー詩集「光は風の中に」に掲載されているものです。この詩を読んでどう思いましたか？

ときどき子ども達の周辺で安易に使われている言葉ではないでしょうか。高所から子どもを見下ろし、だめな原因はすべて子どもという姿勢が伺えます。だめにしたのはいったい誰でしょうか？本当にだめな子なののでしょうか。子どもは未熟なため、ゼロからスタートして学びながら成熟していきます。その途中の過程であるにもかかわらず、この言葉かけはかなり傷つきます。成熟した人のレベルから求めれば、すべてが合格段階に達しておらず不満が生じるのでしょう。どんな人にも得手・不得手があるのに、日頃から不得手な一面だけを見て人格を全否定するような「だめっ子」という厳しい言葉を浴びせれば、誰だって自信を失い萎縮してしまいます。その子を頑張らせようとかけた言葉かもしれませんが、そうは受け取れないのは残念です。この詩を読めば分かるとお受けした人の心の傷は深いものです。人は一つの言葉で傷つき、一つの言葉で希望を抱くものです。

「だめっ子」なんて一人もいない・どこにもいないことを肝に銘じ、子どもを信じて邁進しましょう。

※私達教師は、上記の「桑原 律さんの詩」と「米多 等さんの言葉」をしっかりと受け止めて、日々の指導に全力で取り組みたいと思います。また、ご家庭におかれましても参考にして頂ければ幸いです。

<お知らせ>

上記の校長講話の中でも触れましたように、私は今年の3月末を持って定年退職する事になりました。私の38年間の教員生活を振り返ると、その大半は中学校でしたが、最後の6年間を小学校の校長として過ごせた事を本当に嬉しく思っています。そして、中学校では体育の教師として生徒指導に携わり、恐い先生として「叱り役」を引き受けていた面もあったので、「楽しい思い出」は中学校での32年間よりも、小学校での6年間の方が多いような気がします。

これからも、残りの日々を大切に「楽しい思い出」を沢山作りたいと願っていますので、今後とも宜しくお願い致します。